

イタリアが“歌の国”と言われるのは、時代を超えて世界的に愛好されている素晴らしい多様な歌を大量に作り出したからだ。オペラでは、ロッシーニ作曲の『セビリヤの理髪師』（1816年初演）、ヴェルディの『椿姫』（1853）、プッチーニの『蝶々夫人』（1904）などなど、今も各国で盛んに上演されている傑作は他の国のものより圧倒的に多い。そして、大衆のポピュラー・ソングとしてのカンツォーネがある。まず世界的に知られたのはナポリ地方の言語による歌、つまりナポリターナで、「オー・ソレ・ミオ」「サンタ・ルチア」など数多い歌がナポリ民謡として日本でも古くから親しまれている。1951年に歌曲コンクールのサン・レモ音楽祭、52年にナポリ音楽祭が始まり、それらの参加曲「ヴォラーレ」「コメ・ブリマ」など世界的大ヒットが相次ぎ、カンツォーネは世界のポピュラー・ソングになったというわけだ。

イタリアの歌、音楽のメロディーはとても美しくて親しみやすい。明るく、大らかで楽しく、時に感傷と哀愁の陰影で人の心をつつみ込む。イタリアのジャズ・ミュージシャンがオペラのアリアやカンツォーネをレパートリーに入れたがることは、当然というものだろう。ヴィーナス・レコードの原哲夫プロデューサーはこれまでに、イタリアのオペラ、カンツォーネ、映画の名曲によるエンリコ・ラバ(トランペット)の『イタリアン・バラッズ』(1996年録音)と、ステファノ・ボラーニ(ピアノ)トリオの『ヴォラーレ』(2002年録音)というごきげんなアルバムを作った。そして今回は、イタリアの俊英ピアニスト、ダニーロ・レアのトリオでイタリアン名曲集を作った。ここにはオペラ曲を含まず、ナポリターナと現代カンツォーネによってロマンティックなイタリアン情緒をお楽しみいただく、という嬉しい趣向になっている。

いまイタリアのジャズ・ピアニストとして3本の指に入るというダニーロ・レアは1957年、ヴィチエンツァ生まれ。1975年にローマ音楽院を卒業。すぐにベースのエンツォ・ピエトロパオリ、ドラムスのロベルト・ガットとトリオ・ディ・ローマを結成して注目された。イタリアにやってきた多くのジャズ・ミュージシャン、たとえばリー・コニッツ、ボビー・ハッチャーソン、マイケル・ブレッカー、チャット・ベイカー、ジョー・ロヴァーノ、ジョニー・グリフィン、ジョン・スコフィールド、デイヴ・リーブマンらと共演。レコーディングにも活躍。このトリオが参加したイタリアのジャズ歌手ジェジェのアルバムは、日本でも1993年に発売された。その中の「フライディ・ナイト」などでレアのソロが（そしてヴォーカルも！）聴ける。

彼はアメリカとカナダ、欧州諸国、セネガルをツアーし、フェスティヴァルにも出場した。カンツォーネの大歌手ミーナ、クラウディオ・パリオーニ、ビーノ・ダニエレと共演。あのトランペットの大物ニニ・ロッソ(1927～94)と来日したことがある。やがてドクター3というトリオを組み、ザ・クリティック・イタリアン・アウォードの最優秀ジャズ・イタリアン・グループ賞を1998、2001、2003年に受賞。CD『ザ・テイルス・ドクター3』で1999年に最優秀イタリアンCD賞を受賞。彼はCDをドクター3で4枚、ソロ・ピアノで2枚作っている。ソロ・ピアノでの2作目『リリコ』はプッチーニ、ヴェルディ、マスカーニのオペラのメロディーによる即興演奏集。私は未聴だが、きっとビューティフルな作品になっているだろうと思う。

ダニーロ・レアはドラマティックな迫力とリリカルな美しさの双方を、大変にメロディアスな演奏で出してみせる人だ。このカンツォーネ大会も、原曲を活かしながら十分にジャズ化するという難しいことを、鮮やかにやってのけた。ベースのアレス・タヴォラッツィはボラーニ・トリオの一員。ガット(1958年ローマ生)はラバ・カルテットの一員。

- レジネッラ

ナポリの有名な詩人リベロ・ボヴィオの作にガエターノ・ラーマが曲をつけて1917年に出版された「レジネッラ」(可愛い女王さま)は、愛の終わりのカンツォーネで、いまま歌われている名作。それにインスパイアされてクラウディオ・パリオーニが5年前に書いたのが、このタンゴ風味のある佳曲。パリオーニは人気の高い歌手で歌曲も書く。彼がゴッジオと共作した「道はひとすじ」は1974年のサン・レモ音楽

Romantica

- レジネッラ Reginella 《C. Baglioni》(5:34)
- サンタ・キアラ寺院 Munastero 'E Santa Chiara 《Barberis / Galderi》(4:35)
- すてきなあなた Tu Si' 'Na Cosa Grande 《D. Modugno》(5:18)
- カタリ・カタリ Core 'Ngrato (Catari Catari) 《S. Cardillo》(3:59)
- サンタ・ルチア Santa Lucia 《T. Cottrau》(4:59)
- どうしたの Che Cosa C'è 《G. Paoli》(6:01)
- 帰れソレントへ Torna A Surriento 《E. De Curtis》(6:19)
- マリウ愛の言葉を Parlami D'amore Mariù 《C. A. Bixio》(4:20)
- ある夕食のテーブル Metti Una Sera A Cena 《E. Morricone》(5:22)
- レスタ・クンメ Resta Cu' mme 《D. Verde, D. Modugno》(5:53)
- ウン・ジョルノ・ドーボ・ラルトロ Un Giorno Dopo L'altro 《L. Tenco》(4:04)
- 夜の想い Se Stasera Sono Qui 《L. Tenco》(4:43)
- 恋する兵士 O' Surdato 'Nnammurato 《E. Cannio》(4:52)
- 夜空のトランペット Il Silenzio 《N. Rosso》(6:38)

<p>ダニーロ・レア Danilo Rea （piano）</p> <p>アレス・タヴォラッツィ Ares Tavolazzi （bass）</p> <p>ロベルト・ガット Roberto Gatto （drums）</p> <p>録音：2004年1月29、30日　ザ・ハウス・レコーディング、ローマ</p>
<p>© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>
<p>*</p>
<p>Produced by Tetsuo Hara . Recorded at The House Recording Studio in Rome on January 29 and 30, 2004. Engineered by Simone Ciammarughi. Assistant : Emanuele Bossi. Artist Management : M. G. M. Produzioni Musicali. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Cover Photo : © The Estate of Guy Bourdin / Art + Commerce Anthology / G. I. P. Tokyo. Photos by Tetsuo Hara. Designed by Taz. Special Thanks : Alessandra Bottari.</p>

祭でジャンニ・ナザーロによって歌われて入賞した・ユッサー・ンドゥールやバコ・デ・ルシアらがゲスト参加したパリオーニのCDは日本でも1991年に発売された。

- サンタ・キアラ寺院

第二次大戦中の1943年8月、サンタ・キアラ寺院のあるナポリは爆撃で多大の被害を受けた。戦後間もない1945年上演のレヴュー『被告たちよ、立ち上がろう！』のためにミケーレ・ガルディエリ（詞）とアルベルト・バルベルス（曲）が書いたこの歌は“ 街も人の心も荒れたのではないだろうか、早くナポリへ帰りたい… ”と歌われる傑作。トリオは「朝日の如くさわやかに」を挿入している。

- すてきなあなた

ロベルト・ジーリが作詞、「ヴォラーレ」「チャオ・チャオ・パンビーナ」の作者ドメニコ・モドゥーニョが作曲。1964年のナポリ・カンツォーネ・フェスティヴァルでモドゥーニョとオルネラ・ヴァノーニが歌い、優勝曲になった。“ あなたは私に恋心を起こさせるすてきな人だ… ”という歌。トリオはチャチャチャのアレンジで面白く聴かせる。

- カタリ・カタリ

1908年にアメリカで暮らしているナポリ出身のリッカルド・コルディフェロ（詞）とサルヴァトーレ・カルディルロ（曲）が共作し、“ 歌劇王 ”と称されたナポリ生まれの大テノール歌手エンリコ・カルーソに捧げ、カルーソが1911年にカーネギー・ホールで初演した。原題名は「恩知らずの心」。“ カタリ、カタリ、なぜ私にこんなひどい言葉を言うのだ、すべては終わってしまった… ”。カタリは女性カタリーナの愛称。イタリア映画『純愛』（1951年）と『ナポリの饗宴』（54年）に使われている。

- サンタ・ルチア

ナポリのサンタ・ルチア海岸の美しい風景を歌い込んだ世界的に有名な舟歌。原曲は18世紀初頭ごろのオペラのアリアだったらしいが、

テオドロ

テオドロ・コットラウが採譜・編作し、エンリコ・コッソヴイチが標準語の歌詞を書いて1848年に出版した。トリオは思い切り大胆なアレンジとテンポで意表をつき、ホットでスリリングなアドリブを繰りひろげる。

- どうしたの

作者ジーン・バオーリは1934年モンファルコーネ生まれのシンガー・ソングライター。1960年に「雌猫」でデビューして注目され、カンツォーネの“ ヌーヴェル・ヴァーグ ”の大スターになった。1962年に「アンケ・セ」を当時ジーンノの恋人だったオルネラ・ヴァノーニが歌って大ヒット。それに続いてヒットしたのが、この美しい愛のパラードだ。

- 帰れソレントへ

ナポリ湾の南にあるソレント岬に建っているトラモンタート・ホテルのコマーシャル・ソングとして、1902年にジャン・パッティステ・デ・クルティスが作詞、15歳下の弟エルネストが作曲した。だが、音楽出版社の社長の助言で宣伝色を抜いた歌詞に改めて1904年に出版され、すぐに大流行したという。“ 私を苦しめるな、ソレントへ帰っておいで… ”と呼びかける切なくてエモーショナルな歌。

- マリウ、愛の言葉を

マリオ・カメリーニが監督した1932年度イタリア映画『悪漢たち』の主題歌で、エンニオ・ネーリが作詞、チェザーレ・アントニオ・ビクシオが作曲、主演の新人ヴィットリオ・デ・シーカ（後に監督としても有名）が歌ってヒットした。“ マリウ、今夜の君はとても美しい。君の瞳の中には星の微笑みが輝いている… ”。アンドレ・ド・パデがフランス歌詞を書いてシャンソン「過ぎゆくはしけ」となり、ヒットさせたりス・ゴーティのレコードは日本でもそのころ大好評だった。

- ある夕食のテーブル

ジュセッペ・パトローネ・グリフィ監督の1969年度イタリア映画『ある夕食のテーブル』の主題歌で、巨匠エンニオ・モリコーネが作曲、監督自身(クレジットでは名と姓が変わっている)が詞を書いた。モリコーネはこの映画の音楽で銀リボン最優秀音楽賞を受賞した。“ ある夕方の時、お互いの目を見て愛の消滅を知った… ”という歌。

- レスタ・クンメ

ディーノ・ヴェルデ（詞）とドメニコ・モドゥーニョ（曲）のコンビが、1959年サン・レモ音楽祭の優勝曲「チャオ・チャオ・パンビーナ」と同時期に書いたメランコリックな歌。

- ウン・ジョルノ・ドーボ・ラルトロ

ルイジ・テンコが1966年に書いた。彼は1938年3月生まれの天才的なシンガー・ソングライター。1967年1月27日にサン・レモ音楽祭で恋人のダリダと組み、自作「チャオ・アモーレ・チャオ」を歌ったが落選。失望した彼はその夜、ピストルで自らの命を絶った。

- 夜の想い

モゴール（詞）とルイジ・テンコ（曲）が共作し、1967年の夏のディスク・フェスティヴァルでウィルマ・ゴイクが歌って第3位入賞。“ 今夜ここにいるのは君を愛し、君が私を必要としているからなのだ… ”。

- 恋する兵士

ナポリ生まれのアニエロ・カリファーノが作詞、エンリコ・カンニオが作曲。1915年にナポリのビエディグロッタ音楽祭で歌われ、優勝曲になった。兵士が行進しながら速く離れた恋人を想う、という行進曲風の歌。“ 私の心は君のところへ空を飛んでゆく、君を私のそばに置くこと以外に望みはない… ”。

- 夜空のトランペット

1965年にニニ・ロッソが作曲、セレステとグリエルモ・ブレッツァが作詞したロマンティックなカンツォーネ。ロッソのレコードがイタリアのチャートで6週1位になり、ヨーロッパ諸国で大ヒット。日本でもロッソ盤が「夜空のトランペット」(原題名「静寂」として65年夏から大当たり。アメリカのジャズ系トランペット奏者アル・ハート、レイ・アンソニーのレコードもある。

（2004　青木啓）